



「愛される」ための努力と、「満たされる」ための虚言

学校長 小木曾敏樹

1年が終わろうとしています。子どもの頃の1年間は長かったのに、大人になるとあっという間に過ぎていきます。そんなあっという間の1年間で、子どもたちは本当に大きく成長したと感じています。1年生はもうすっかり小学生。いろいろなことをテキパキとやれる子がたくさんいます。2年生は幼児性が消えてきて中学年のしっかりした顔になっています。3年生は授業に向かう姿勢や集中が見違えるほどしっかりしました。4年生はもう高学年っぽさを醸し出す落ち着きがあります。5年生は最高学年になりリーダーになるという意欲が見えます。そして6年生。大人っぽさ、落ち着き、自信が感じられ、もう中学生です。4年生が新1年生で入学してきた時から見ている私には、その成長は驚きとしか言い様がありません。

子どもたちは日々成長を続けているのですが、何も問題なく成長している訳ではありません。先日、今年最後の心と体のアンケートを実施し、すぐに必要な児童とは個別の聞き取りや面談を実施しました。健康に関すること、勉強に関すること、人間関係や学校生活に関すること、家庭生活に関すること、これらの項目でチェックがあった子やチェックはなくても教師側から見て心配がある子には、詳細な聞き取りを実施します。チェックはしたものの、たいしたことではないというのがほとんどです。それは、ご家庭で話をして自己解決に向かっているからなのでしょう。家庭生活に関することでは、兄弟げんかがNo.1です。次には親から怒られることを悩みに感じている子が多いようです。



20年前、我が家の子育て期もそうでした。女の子3人姉妹なのに取っ組み合いのケンカをしていたり意地悪をしたり、大声で叱るのはよくないと分かっているのに、ついつい叱りつけたりしていました。学校ではそれなりにいい子でいたようです。それは当然といえば当然です。学校は社会であり、子どもたちでも社会に適応した行いを心がけます。家庭では学校では見せない子どもたちの素の姿が出るからです。「もういい加減にして!」と言いたくなるようなことがあっても、それが子どもで、それが家庭というものなのでしょう。

教員生活を40年近くやっていると、その逆のパターンに出会うことがあります。家庭では全くいい子で、学校では問題がある子というパターンです。これは非常に難しい。なぜなら、学校で問題だと思えることをお伝えしても、保護者はその姿が想像できないからです。

中学校で勤務している頃、生活態度、学習態度も悪く、人の悪口を言ったりしてトラブルが多い女子生徒がいました。指導をして保護者に連絡をしてもなかなか理解をしてもらえません。それどころか、自分の娘が嫌がらせを受けているとか、先生の指導の仕方に問題があるなどと、逆に言い返されてしまう。そんなことが何回も繰り返され、そのまま卒業してしまいました。彼女が大人になってから話す機会がありいろいろ話していると、当時のことを話してくれました。母親が非常に厳しく、すぐに感情的になるので怖くていい子になるしかなかった。何かを話しても相談しても、説教か叱られるかになるから何も話せない。ただ、自分が被害者になったという話は聞いてくれたから、そういう話ばかりをしていた。小さなことも大きなことにして。なかったこともあったことにして。嫌がらせも悪い指導も作り話だったということ。

彼女は、愛されるためにいい子を演じ続けた。夕食の片付けをしたり、お手伝いをしたり。彼女は、甘えるために嘘をついた。こんなひどい目に遭った、こんなイヤな指導を受けたと。聞いてくれ一緒に腹をたててくれる母に、愛されているという感情で満たされたいがために。

他にも、ピアノを習っている子。ピアノを頑張るのは、好きだからではない。サボると、上手く弾けないと叱られる、上手く弾ければ褒めてくれる。だから、ピアノを頑張る。母に愛されているとは思わない。ピアノをやめたらもっと愛されなくなると言うと言っていた。

野球、野球の毎日。月曜日は土日の練習や試合の疲れでぐったり。それでも毎日夜の練習は欠かさない。やらなければ父親から怒鳴られる。試合でいい結果を出せば父の機嫌がよくなる。

この子たちのストレス発散の場所は学校。ピアノの子は、女子へのいじめや悪口。野球の子は友達への暴力。どちらも家では素直な頑張る子、学校では仲間を悲しませるトラブルメーカーでした。これに似たケースは他にもよくあります。親が気づいていないだけで、実は子どもは家庭でどこか緊張している精神状態で生活をしていただけです。

「愛されたい」から

気付いてはあげられた、話は聞いてあげられた、親にも少しだけ話した。けれど、解決はしてあげられなかった。なぜならば、生徒がこのまま我慢すると言うからです。たぶん、これが親なりの愛情であろうと、自分の中で理解しようとしているからです。



しかし、頭で理解しようとしても体や心がついていかない。だから、身体症状に出たり、いじめや暴力、嫌がらせなどの行為で無意識にストレスを発散していたりするのでしょう。

この子たちは大人になってもこうなのかといえば、違います。それぞれ立派な大人になっています。野球の子は高校を中途退学し野球をやめました。心が折れてしまったからでしょう。女の子たちは家庭をもち、自分の親のようににはならないようにと一生懸命親をしているそうです。大人になって、乗り越えて、それが愛情であっただろうと言い聞かせることができたからでしょう。しかし、思春期に失ったものも大きかったはず。仲間と心通わせ、みんなで頑張るとか、みんなで作り上げるとか、そういう喜びはあまり得ることはできなかったから。

いい子になって愛されたい・・・そう子どもに思わせることは罪だと思うのです。子どもは、本来、その存在自体を愛されなければいけない。子どもは親を無条件に愛しています。その存在の大きさや温かさを求めています。大きくなるまでは、ですが。ならば、親も同じでなくてはなりません。無条件に愛することです。子どもを自分の所有物のように感じてしまっていたり、過度の期待をもちすぎたりしてしまうと、条件付きの愛になってしまう。

子どもが求めているのは、無条件の愛。叱るのも愛情の一つですが、それ以上に無条件の愛があるからこそ、叱る愛も受け止められる。



子どもは可愛い嘘つきです。でも、苦しい嘘をついていたとするならば、大人の責任を疑ってみましょう。

大人と同じように、子どもにも2人の自分が存在します。よそ行きの自分と素の自分と。1人の中にいる2人の我が子をしっかり見つめてあげましょう。

親が思っている愛情と、子どもに届いている愛情は、違うかもしれません。どれくらい愛が伝わっているのかを見つめてみましょう。

自分が子どもの頃に受けた「無条件の愛」を思い出して、それを我が子にしてみましょう。我が子が、今も、数十年後にも、これが「無条件の愛」だと感じ、思い出せるように。